

子どもの遊びとことば

—「知恵の育ち」と「見て見て」「まねっこ」「ふり」「みたて」—

三田村 啓 子

The Play and the Language of the Children

Keikr MITAMURA

はじめに

筆者は言語障害と発達障害の臨床現場に立つ病院臨床家である。ことばの遅れのある子ども達を援助している。

健全な子どもは1歳前後から、時期がくれば当たり前のように初語が出現し、ことばを話し始める。ことばはコミュニケーションの手段として、最も重要な方法である。子どもは遊んでことばを生み出してくる。子どもの遊びとことばの発達を述べるには、さまざまな立場と方法があり、まだ解っていないことも多く、書ききれぬ大きなテーマである。厚い本1冊でも語り尽くせない。

筆者はことばの発達、特に生後から言語機能の形成の始まりまでを「知恵の育ちと見て見て、まねっこ、ふり、みたて」の5つのキーワードで説明している。今回は「知恵の育ちと見て見て、まねっこ、ふり、みたて」に代表される幾つかの核になる遊びとことばの発達を、生後からことばの機能が獲得される1歳6カ月前後までの時期を検討したい。

ことばはそれぞれの言語の約束事

筆者の治療室にはさまざまなおもちゃが置いてある。半分は割れる卵のおもちゃやビー玉を

転がすおもちゃなどがある。子どもは、筆者の部屋や筆者を、「たまごパカン」や「ビー玉コロコロ」と名づける。部屋や筆者全体を「たまご」「ビー玉」で代表し、特定のことばで表現している。これがお互いの共通の理解になっているから「たまご」「ビー玉」は、筆者や治療室であることが了解され、コミュニケーションができるのである。

ことばは、人と人のコミュニケーションの約束事である。

日本語の「たまご」は、英語では「egg」と虫や鳥の産まれた時のあの楕円形のものにことばを当てはめて、それぞれの言語で、それぞれの呼び方をしているだけである。「たまご」を知ると、あの物体を思い浮かべることができ、「たまご」が欲しいときに「たまご」と発音すれば良いのだ。日本語と英語ではそれぞれその音声で表現されると決まっているだけなのである。ことばは、人と人のコミュニケーションの約束事で、ことばの発現はこの約束事を理解して、その音で表される発音をすることなのである。単なる音のまねではことばではない。

子どもは、生れた時から、母国語の海で育ち、母国語の約束事を受け止めるのである。この約束事が理解できなければことばは育たない。

「ことばを生み出す本能」の著者 スティーブン・ピンカー¹⁾ (Steven Pinker, 1994) は子どもの中に生来的にことばを生み出す能力が備

わっていると述べている。

「知恵の育ち」と「見て見て」
「まねっこ」「ふり」「みたて」

遊びはことばの発達に欠かせない。「お母さん子どもと遊んで」と助言すると、「遊ばないんです」「ひとり遊びが好きなんです」「一緒に遊ぼうとすると怒るんです」「どう遊んでいいのかわからないんです」と決まったかのように返事が返ってくる。人とともに遊べないからことばの発達が遅れるのである。「知恵の育ちと見て見て、まねっこ、ふり、みたて」はことばの発達を促す核になる遊びを端的に説明するのに筆者が使っている。

子どもは生れてすぐに知恵を育て遊び始める。知恵の育ちは、身体や運動発達、認知の発達を総称している。その月々に知恵を育て、外界を取り入れ、両親や周りの人々のまねができるようになる。声も抑揚やそれらしい音声のまねも多くなる。新しい知恵が育ち、まねができるとおとなに「見て見て」と要求を出し、自分の喜びを共有しようとする。やがて、1歳をすぎると、食べる「ふり」をして、そこに食べ物がなくてもかわらず、あるかのように「ふり」ができる。ことばも卵が「たまご」で表されている一種の「ふり」の約束事といえる。目的のものを指さす、指さしの身振りも育ってくる。音声模倣も確実になり、おとなにもわかることばになっていく。1歳6カ月前後になると、象徴機能といわれる本来の事物の用途から離れ、他のもので置き換える「みたて」が始まる。後に述べるが、本来の事物から離れ、他のもので置き換えることは、ことばの本質として非常に重要なことである。事実、象徴遊びの出現はことばの発達には大きな節目で、象徴化の程度が高次になるにつれ、ことばが発達することは確かである。なぜ、どのように子どもはことばを獲得するのか、5つのことばで説明できるものではないが、今回は、身近な遊びを追いながら、ことばの発達を追うことにする。

知恵の育ち

子どもは、吸って、泣いて、触って、なめて、見て、聞いて、握って、動いて知恵を育てて行く。

1. 泣く 新生児～1カ月

新生児から1カ月は、口の横に物が触れるとすぐに吸い付き、触れた物を握っている。音や人の声に反応し、ガラガラや母親の顔を見つめる。声は「アー」とも「エー」ともつかない声を出す。目覚めているときは実に良く泣いている。「泣く」は子どもが生まれつき持っている人に訴える手段である。空腹で泣き、お尻が濡れたと泣く。快、不快の生理的泣きといえるが、新生児室などでひとり泣き出すと、他の子どもも泣き出す。子どもの耳ざわりな全身全霊をかけた泣き声は、母親を呼び寄せる効果があるように思われる。

正高²⁾は新生児にとって泣くことは多大なエネルギーを必要とする行動で、出費の見返りとして、養育者から手厚い待遇を受け帳尻を合わせており、その中で呼吸をコントロールするすべを身につけ、やがて周囲に伝達の意図を持って、多様なレパトリーの音を発し分ける技へと進歩して行くのだろうと推測している。子どもは生れながらに人と関わる強力な伝達手段を持っていると考えられる。

2. 把握の発達・クレーピング 3カ月～4カ月

3カ月になると、はっきりと子どもの遊びがわかる。お乳を吸っていて、少し満足するとお乳を口から離したりして遊ぶ。気に入らないと反り返って怒り、物を握り遊ぶことが可能になる。

この時期の大きな発達は、目で見たものを握れるようになることである。

それまでは、自分の身体に限った感覚運動的な遊び、例えば手を開いたり閉じたりを繰り返す。3カ月になると握ったガラガラを繰り返し振り、見つめたりするようになる。偶然組み合わせた手を飽きずに見る。3カ月では握らせたものを目の前に持ってきて見つめられるが、目

で見たものを握ることはできない。4カ月になると、目で見たものを握るようになる。手当たり次第に握る。こすったり、たたいたり物を調べているようである。把握も何度もくり返し、目と手の協応が成立してくる。視覚や聴覚などの個々の感覚と運動機能をつなげることが可能になる。目で見た物を握る行動は子ども自らの働きかけで、誰かに指示されたものではない。子どもが積極的に外界を取り入れる画期的な発達と思われる。ピアジェ³⁾ (Piaget, 1936) は子どもが繰り返し行なうこれらの遊びを循環反応と呼び、子どもの発達の起縁となる重要なものと考えている。

この時期には、母親が授乳の姿勢に抱くと泣き止み、姿勢と授乳を結びつけることができるようになる。姿勢の違いを認知する。この姿勢が授乳のシグナル(信号)としての役割を果たすようになる。母親も子どもの発する声や動きを空腹なのか、抱いて欲しいのか、特定の状態や要求を示すシグナルとして受け止める。シグナルを受け止められた子どもは能動的にシグナルを送り出すようになって行く。すでにことばの前のコミュニケーションが成立しているのである。

岡本¹⁾は子どもが無数の刺激にさらされ、その刺激の多様さに圧倒されず生き抜き、立派に立ち向かうことを感嘆している。子どもが刺激にまったく受け身に反応するなら、早晚子どもは破産するであろう。子どもは、刺激に満ち満ちた外界を個々の刺激として対応するのではなく、外界の刺激を自分にとって意味のある「シグナル」として受け止め、外界の刺激と刺激を関係づけ、ひとつひとつの刺激に対処していく。人との関係や外界の刺激をシグナルとして読み取るばかりでなく、そのような関係付けや読取りを逆に利用して、自分の行動そのものを他人に対する記号として使用していくことができる。

泣き声も変化させる。目が覚めている間の機嫌の良い時間が長くなりクーイングと総称される「あっくーん」のような声を出すようにな

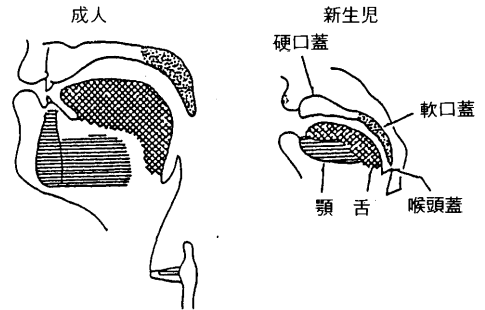


図1 成人と新生児の、のどの形態の比較

る。この発声は骨格が短期間に急速に成長し、発声器官が成人タイプに変化(図1)するから可能になる(正高⁵⁾)。これが声の最初でかつ最大の変化で、はじめての声変わりである。声の変化も、機嫌が良いのか悪いのかなど、シグナルとして働き、受け取られ、コミュニケーションを深めていく。

3. 「いないいないばあ」6カ月～7カ月

この頃になるとお座りができるようになる。体の位置が高くなり、周りが良く見える。寝返りやはいはいで不十分ながら移動もでき、興味ある物を取りに行くことができる。外界の取り入れはますます盛んになる。机の上のスプーンで机をたたき、振り、なめたりする。物を持ちかえ、両手を打ちあわせて遊ぶ。物を落として喜び、落ちた場所をのぞく。この頃はこのぞいてもおもちゃが見つからないとすぐ興味を失う。しかし何度も落とす。今ここに在ったものが、自分の行為で見えなくなる。物を落とす遊びは、1歳過ぎまで徐々に複雑になり続いていく。これも循環反応で繰り返し繰り返し、おとなが嫌になるぐらい続く。

おもちゃなどを落として遊ぶのとはほぼ同時期に、子どもは「いないいないばあ」を楽しむようになる(図2)。顔にハンカチなどをかけると一瞬驚くが、「いないいないばあ」とハンカチをとると大喜びする。繰り返すと声を立てて笑う。手の操作性が更に発達し、おとながハンカチを取らなくても、自分でなんとかつかんでハンカチを取る。ハンカチをとるのに合わせ「ばあ」と声をかけるとさらに喜ぶ。この遊びは隠

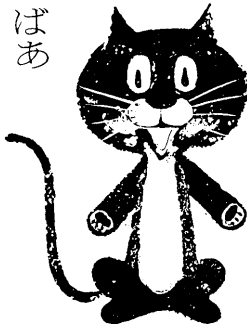


図2 いないない ばあ (松谷)

れていた視野が急に広がり、見えたり見えなかったりすることを楽しんでいる。見えなくなっても、そこに人がいて、物はあることを理解し始める。

4. 喃語の始まり

正高は喃語を「真の意味で音声言語の前駆的形式を備えた発声」としている。初期には「アー・アー・アー」と多音節だが子音プラス母音の構造を持たない「過渡的喃語」の後、「マンマンマン」「ダ・ダ・ダ」「パ・パ・パ」と子音の構造がプラスされた「規準喃語」が出現してくる。6カ月から8カ月で喃語は迅速に行なえるようになり、おとな並みに複数の音節が発声可能となる。

中島⁶⁾は日本人とアメリカ人の子どもの音声発達を追跡、母国語の獲得を研究した。中島によると、日米の子どもの発声している喃語は同じで、ありとあらゆる音声を発しているという。したがって親の音声の影響は受けていない。この音声は、日本人の子どもは日本語の言語体系と音声言語を、アメリカ人の子どもは英語の言語体系と音声言語を選び取るという。人との関係で子どもは聴覚的外界も選び取り、知恵を育てていく。

生来的に、聴覚に重度の障害を持つ子どもも、喃語「アーアー」はおなじように発するらしいと言われている。しかし、この喃語が消えていく。喃語が十分に発達し、この過渡期の今ここに在ったものが、自分の行為で見えなくなる。長い音節の産出には聴覚的フィードバック

が不可欠であることを示している。子どもは、自分の声を聞いてフィードバックするばかりではなく、周囲のおとなや子どものことばを受け止められるようになる。

知恵の育ちと「見て見て」「まねっこ」

1. 人見知りと物の永続性 8カ月～10カ月

この時期は、人や物の認知が急速に発達、有機的に関係づけられる。

人との関係では、「人見知り」がはじまる。

5, 6カ月ごろは見知らぬ人に対しては、怪訝そうに相手の顔を見ていることが多い。8カ月頃から、母親にしがみついたり、泣き出したりする。子どもによっては、1歳を過ぎても続くことがある。

冷蔵庫を開けたり閉めたりを繰り返して遊んでいる。中の温度が上昇するので「だめ」と言うと、手を止めて母親を見る。また冷蔵庫の戸を開ける。「だめ」と言われると笑い始め、何度も繰り返す。戸を開けたときではなく、「だめ」と言われた瞬間に笑う。子どもは冷蔵庫の戸を開ける知恵が発達し、母親の言動に禁止の意味を受け止め、いたづらをするようになる。こうすれば相手が「だめ」と言うことを予想して、いたづらをする。戸を開けることが「だめ」を引出す記号となっている。

台所の下扉を開けてさかんに鍋のふたを取り出し、トイレに入り込みトイレトペーパーをガラガラ引っ張っている。引き出しを開けて、中の衣類を引っ張り出す。探索活動が実に活発になる。物をひっぱりだす操作も発達する。積み木を打ち合わせ、得意になって「見て見て」とばかりに母親のほうにさしだす。自分の行動を相手に見せようとする。

高パイやつかまり立ちが可能になり、視野がさらに広がり、移動能力が飛躍的に発達する。探索活動や操作の発達は身体運動発達にも支えられている。

さらにこの時期の画期的な認知の発達は「物の永続性」である。それまではおもちゃが隠れると急速に関心を失い、落としたものが見えな

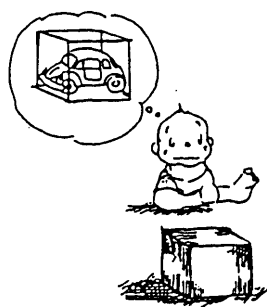


図3 物の永続性 (中島)

くなると、後を追うことはない。この時期になると、人形や自動車をハンカチで隠しても、ハンカチをすぐに取り去り、おもちゃで遊び続ける。これは、外界の事物が見えなくなっても永続的にそこにあることを認知するようになったのである。ピアジェはこれを「物の永続性」(図3)と呼んでいる。これまでは、人形は全体が見えないと人形であることがわからない。このころになると人形の足が見えると、すぐに引っ張り出す。一部を見てそのものであることが分かる。足が人形のインデックス(標識)となっている。前述のシグナルでは、特定の姿勢が授乳を意味し、行動触発の記号として働いたが、インデックスは一部の特定の部分がその全体像を理解する記号として働く。子どもは自分の目にうつるたくさんの事物を理解し、一部を見ただけで人形を人形として理解するようになる。目に見えない存在もわかる。人や物に名づける基盤ができて上がっていく。

2. まねっこから初語へ

まねが重要なことは改めて語る必要はないであろう。「まね」が育たなければことばは生まれない。

まねの萌芽は、すでに新生児から始まる。

岡本は、生後3日以内の新生児の目の前で、口の開閉や舌の突き出しを繰り返すと、新生児が口元の筋肉を引き締めたり、口を尖らす。これを「共鳴動作」と呼んでいる。この共鳴行動は、特に3カ月から4カ月によく観察される。

5, 6カ月には共鳴行動は抑制されはじめ、8

カ月頃、選択的な意図的な模倣が現れ始める。正高は4カ月頃になると、母親が自分と同じ声を出しているようだと認知し、自らも母親に合わせようと努めて発声を企てるとしている。音はすぐに消えてしまう。子どもの耳に届いた音を、しばし、耳に留めて、その時持っている声を用いて再現するまねっこまでには、長い道程が必要と思われる。

人見知りするようになると、喃語の音声を産生して、母親に要求するようになり、愛着のある母親の動作を特に積極的に模倣するようになる。

8, 9カ月から「まねっこ」の力は著しく発達する。新しい動作の模倣ができるようになり始める。模倣はひとりでは起こり得ない。模倣する対象がある。模倣はそれだけで社会的動作であり、人と共有している。「いないない、ばあ」も10カ月になるとおとながした後に、すぐ模倣できる。音声も「ばあ」と模倣する。この著しい「まねっこ」遊びから新しい動作のシグナルを身につけていく。相手の人と同じ動作・音声の模倣の発達は、コミュニケーションのための、記号の共有の発端となっているように思われる。

模倣が上手になってはじめて、子どもはおとなが話している同じことばを表出する準備ができる。子どもが、初めておとなのことばを発音したとき「初語」と言われる。だいたい10カ月から14カ月頃である。ことばはここまで追ってきたように、さまざまな「知恵の育ち」と、人に伝えたい訴えたい見せたい「見て見て」と、状況のなかで動作や声の「まねっこ」が育つと、ことばは準備され、構築されて生み出されるのである。

ふ り

「ふり」はからだでの表現である。まだことばが十分発達していない時、社会的な記号としておとなとのコミュニケーションを促す。10カ月頃から指示対象のはっきりした意図的な身振りが現れる。身振りは大きく2つに分けられ



図4 指さし

る。体の一部を伸ばしてある方向を指さす「直示的身振り」、もう一つは身体の動きそのものが何か別のものを表現する「象徴的身振り」である。

子どもは、手を伸ばして「冷蔵庫をあけて」とおとなに訴え、おとなを動かして要求をかなえようとする。

12カ月頃になると、人さし指(図4)でさしながら良く知っている冷蔵庫などをおとなに教えようとする。麻生⁷⁾によれば、指さしの最も初期の段階から、指さしと同時に、物の名前を示すような「わうわ(ん)」などの声が発せられる。これは、おとなの使用する相手にそれと分かる記号である音声「わうわ」で物に注意をひこうとし、伝えようとした。コミュニケーションがさらに進みはじめた。

象徴的身振りは、物や動きを表現する。アクレドロとグッドウイン⁸⁾(Aciredolo and Goodwyn, 1990)は、「身振りの単語」ともいうべきものの出現について研究した。象徴的身振りは、10カ月から20カ月の間に現れ、ひとりひとりのこどもの音声による単語の出現と身振りの単語の出現時期はほぼ同時期であるという。指さしの関係も、指さしの出現と同時あるいはやや遅れて初語が出現する。

初語は特定の対象あるいは特定の状況と結びついて、おとなに分かる発話されてはじめて初語といえる。

しかし、ことばの遅れのある子どものことばの出現は、こどもによっても遅れの違いもあるが、同時期とは言えないことが多い。身振りでの表出からことばでの表出には、指さしから初語までは多少なりとも時期のずれがある。身振りや指さしが初語の出現の十分条件であるようだが、必要十分条件ではないようである。こと

ばや認知の発達遅れは、健全な子どものシグナルやインデックスの形成の質や量の違いを示唆しているように思う。

初語から「みたて」までのことば

12カ月～1歳6カ月

12カ月頃には、道具を見ただけでスプーンや鉛筆などを模倣的に使用できる。子どもは事物を「どのような行動をすべきものか」という観点から意味づけているらしい。子どもは、このころは物の性質が分かり、それらしく使用する。そのものを指さして、自分の知っているものを「私が知っているのを見て」と訴え、「あーあー」と教える。自分から「バー」と言い出し、相手が言い返すと何度も繰り返す。意味のあることばを使い始めるが、言語機能はまだもない。綿巻⁹⁾によれば、一度出現しても消えていくことばが多いという。

1歳3カ月頃になると、自動車のキーを親が用意していると、出かけることを理解、玄関で待っている。「アイー」と「キー」らしき声で話かけ、外へつれていけと要求を伝える。いろいろな経験を人と共有し、お互いに要求や意図を伝えあう手段としてのコミュニケーションにふさわしい、指さしなどの動作や音声を習熟して作り出してきた。

小林¹⁰⁾は事物に対する子どもの行動と発話を縦断的に観察した。こどもが物の名前を獲得する前に、物に特殊な慣用操作が行なえるようになる。慣用操作から物の名前が発話されるまでの間には、特殊な操作を言語的に表現する段階が認められた。ある子どもはボールを1歳6カ月では「ポーン」、1歳9カ月では「ポーンてんの」、1歳11カ月になっておとなと同じ「ボール」が現れた。

指さしと手のひらを上に向けて差し出す「ちょうだい」の身振りを組み合わせる2語発話の原形を示し始める。1語発話から2語発話の発現には「ふり」がつなぎの役割を果たす。

しかし、ことばがことばとして、伝達する手段として機能するには、それまでの「知恵の育

ち」や「見て見て」「まねっこ」「ふり」では十分ではない。岡本はことばが単なるシグナルではなく、対象を表示する「シンボル」であるという。音声をシンボルとして使いこなす象徴機能の形成をまっけて、音声はことばとして機能するのである。中島によれば言語機能成立のためには子どもの側における象徴機能の形成という一種の飛躍がなければならない。

み た て

みたては象徴機能をさす。

1歳4カ月の子どもが積み木を自動車に見立てて「ぶーぶー」と遊んでいる。1歳6カ月にはその積み木を傾け「ダー」といっている。どうもダンプカーが砂利を落としている場面を見立てているようだ。積み木は、時にはケーキになり、人形に食べさせる。子どもがケーキを食べている時に、人形を側に座らせ、人形に本物のケーキを食べさせようとする。

ピアジェは象徴機能の特質を「意味するもの」「意味されるもの」との分化におく。積み木はそこにはない自動車をイメージしており「意味するもの」、自動車は「意味されるもの」で子どもはこの時はじめてイメージを頭に描いて、意味するものと意味されるものを分化して使うようになった。子どもは象徴機能を形成し始めると、音声を「意味するもの」として使用できるようになる。親の音声がある特定の物や状況を意味している関係に気づくのである。

1歳5カ月の子どもが、ある日スーパーへ買い物に行き、目の前の男性が入り口におつかりそうになり「おっと」とのけぞったのを目の前で見た。数日後、玄関に母親より先に入ろうとして、ふと立ち止まり「おっと」とそりかえった。すぐに模倣するのではなく、数日たって過去を思い出して模倣した。これは玄関で延滞模倣でやっている「おっと」が「意味するもの」でスーパーの男性の「おっと」が「意味されるもの」である。みたてでそこにはない過去のものをイメージできるようになった。延滞模倣は時間をこえて模倣できるようになり、子どもの世界が過去へも広がり始めたことを示している。前に聞いた音声の再現を延滞模倣は可能にする。象徴機能の形成が言語機能の形成と密接な関係がある。

1歳3カ月の子どもが母親に「おこと」が欲しいと訴えている。母親には「おこと」が理解できず、子どもの要求に答えられなかった。しばらくして、「あかんベノントン」を読んでいたとき、ノントンに驚かされ、巣から卵が落ちた絵があった(図5)。「おこと」と指さし、やっと「おこと」が「たまご」であることがわかった。母親はそれから「おこと いる」と子どもに聞き、こどもはちょうだいと手振りをして「おこと」と言った。単語と手ぶりの2語発話につながる動作である。ふと気がつくと、おことは消え、「たまご」と発音していた。そして、1歳7カ月「たまご、ちょうだい」と2語

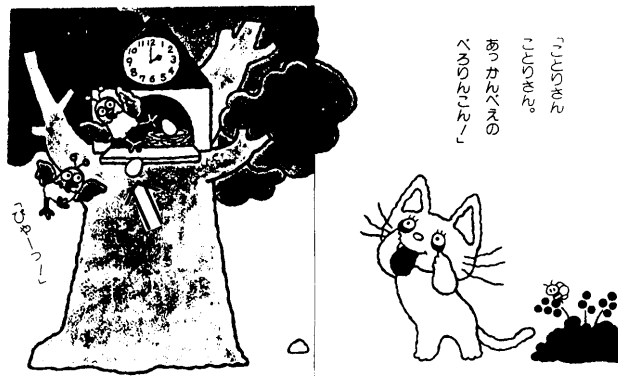


図5 「おこと」とたまごを指す (あかんベノントン おおとも)⇨

発話が出現した。

子どもにとって「おこと」という音声は「たまご」を意味するもので、しっかり象徴機能は形成されているが、音声は「たまご」からかけ離れた「おこと」だったために理解できなかった。この「おこと」発語は象徴機能が単に模倣のみから形成されるのではないことを示しており、象徴機能が一種の飛躍であることを示している。それまでの模倣では考えられない発語はその子どもとの関係でしか通じない。しかし、お互いに了解している関係では十分コミュニケーションとしての役割を果たすのである。やがて、「卵」を「たまご」と特定の対象を特定の音声言語で表現するようになった。象徴機能の形成を基盤として、子どもは特定の状況や対象を特定の音声言語であることばで象徴的に表現する言語機能を形成し始めたのである。

おわりに

子どもの言語機能の形成過程を追うと、ことばは、あらゆる機能を総動員して生み出される。子どもにとって、なんと大変な仕事だろうと思う。まして、ことばの発達に遅れのある子どもにおいては言わずもがなである。しかし、ことばの獲得の遅れは、ことばが生み出されるためには、どのような遊びが必要かを教えてくれる。ことばの発達に遅れのある子どもたちの

臨床経験から「これだけは」と思われる遊びをごく一部取り上げ、言語機能の形成のはじまりまでを概観した。

今回のテーマは2001年健康人間学公開講座で発表したものである。公開講座委員会および学部長の笹田昌孝先生に御礼申し上げます。

文 献

- 1) Pinker S: 言語を生み出す本能 (椋田直子訳). 東京: 日本放送出版協会, 1995
- 2) 正高信男: 0歳時がことばを獲得する時. 東京: 中公新書, 1993
- 3) Piaget J: 知能の誕生 (谷村 覚, 浜田寿美男訳). ミネルヴァ書房, 1978
- 4) 岡本夏木: 子どもとことば. 東京: 岩波新書, 1981
- 5) 正高信男: 言語的音声の獲得. 小林春美・佐々木正人編: 子どもたちの言語獲得. 東京: 大修館書店, 1997
- 6) 中島 誠: 言語機能の成立. 園原太郎編: 認知の発達. 東京: 培風館, 1980
- 7) 麻生 武: 身ぶりからことばへ. 東京: 新曜社, 1992
- 8) Acredolo LP, Goodwyn S: Sign language among hearing infant. In V. Volterra CJ, Erting, eds. Springer-Verlag, 1990
- 9) 綿巻 徹: 一語期初めの言語獲得—語彙の大きさの発達を中心に. 発達心理学研究, 1985
- 10) 小林春美: 子どもたちの言語獲得. 東京: 大修館書店, 1997